

平成30年度研究助成 【音楽振興部門】より



## 昭和初期における管打楽器の 基礎練習に関する教材史研究

— 「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」の比較検討を通じて —

埼玉県立大学保健医療福祉学部

非常勤講師

飯村 諭吉

### 1. はじめに

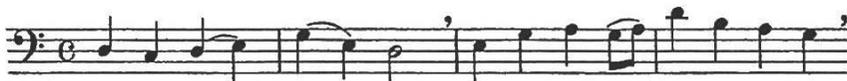
昭和初期における日本の吹奏楽界は、日本管楽器製作所、田邊吹奏楽器製作所による管打楽器の製作販売、吹奏楽コンクールの開催、大日本吹奏楽連盟の設立によって急速な発展を遂げてきた。また、当時の教育機関や職場におけるアマチュア・バンドの合奏形態は、①金管・木管楽器、打楽器による楽器編成の「吹奏楽」、②喇叭類と太鼓類による楽器編成の「喇叭鼓隊」、③笛と太鼓類による楽器編成の「鼓笛隊」であり、そのレパートリーは主に行進曲であった。

一方、これまでの研究においては、当時のアマチュア・バンドはどのような練習法を基礎段階に導入していたのか、当時発行された教材（教科書・教則本）において何を「基礎練習」として提示していたのかについては十分な知見が蓄積されてこなかった。しかし、《日本陸軍》（深沢登代吉作曲）、《軍艦行進曲》（瀬戸口藤吉作曲）のような行進曲風の楽曲が演奏可能なレベルと考えるのであれば、トランペット、クラリネットのタンギングや舌のコントロール、小太鼓のシングルストロークやロール奏法など、各楽器に応じた演奏技術を習得していると推測できる。

本研究テーマでは、こうした問題意識の下、昭和初期における管打楽器の基礎練習に関して「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」を比較検討しながら明らかにし、今日のアマチュア・バンド指導に対する示唆を得ることを目的としている。本研究を通して、「吹奏楽部（団）」「金管バンド」「鼓笛バンド」の起源を解明し、先人の知識・発想を取り入れた練習法を学習者に提案したい。

### 2. 管打楽器の教材とその著者たち

昭和初期における管打楽器の基礎練習を把握するための前段階として、当時発行された管打楽器の教材の著者を確認しておきたい。例えば、日本吹奏楽指導者協会（JBA）初代会長の山口常光（1894～1977）は、陸軍戸山学校卒業後、昭和5（1930）年にギャルド・レピュブリケーン軍楽隊に委託生として入隊する。帰国後は、管楽研究会（日本管楽器製作所の出版部門）から『プラスバンド教本』（1935）、その姉妹本である『プラスバンド合奏練習書』（1936）を発行するなど、「吹奏楽」関連の教材を数多く作成している。なお上記の「陸軍戸山学校」とは、明治初期に東京都新宿区戸山に設置され、体操、剣術、射撃、軍楽の教育・研究が行われた軍学校である。

譜例1 国家《君が代》の練習例（クラリネット譜）<sup>1)</sup>譜例2 国家《君が代》の練習例（チューバ譜）<sup>2)</sup>

次に、1928（昭和3）年創設の東京府立第一商業学校（現、東京都立第一商業高等学校）吹奏楽団の指導者の廣岡九一（1898～1988）は、陸軍戸山学校軍楽隊員の指導を受け、共益商社書店から『スライドトロンボーン教則本』（1933）、『ピッコロ教則本』（1937）などを発行している。

さらに、陸軍戸山学校出身で新交響楽団（現、NHK交響楽団）のティンパニストであった小森宗太郎（1900～1975）は、共益商社書店から『打楽器教則本』（1933）を発行し、小太鼓やシンバルなどの練習法を紹介している。それに続き、陸軍戸山学校出身のピッコロ奏者、ラジオ体操（日本放送協会）の初代アナウンサーであった江木理一（1890～1970）との共著で、『鼓笛隊指導書並教則本』（1938）を発行し、小中女学校等の教育機関に「鼓笛隊」導入の推進を図った。

他方、「喇叭鼓隊」の教材には、陸軍戸山学校著『喇叭鼓隊教科書』（1928）、日本教育音楽協会編『喇叭鼓隊教本』（1936）などが挙げられる。

これらの流れを整理すると、昭和初期に発行された管打楽器の教材は、軍楽隊関係者及び、学校教育関係者の手によって生み出されたものと言える。またここでは、各合奏形態の「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」に関する教材開発が進められている状況を確認することができる。

### 3. 管打楽器の教材とその基礎練習

昭和初期における管打楽器の教材の解説作業を進めるにあたっては、メロディー、リズムなどの楽曲分析と並行して、「軍楽」を視野に入れて検討を行うことが必要であると考えている。このような背景を踏まえ、以下では、各教材に採録された基礎練習の例をいくつか紹介したい。

#### (1) 国歌《君が代》を利用した練習例

明治13（1880）年、国家《君が代》の現在歌われているメロディーが作曲された。その後、海軍軍楽隊の教師であるフランツ・エッケルト（F.Eckert、1852～1916）により、吹奏楽用に編曲（変ロ長調）されたと言われている。

上記を踏まえ、昭和初期における管打楽器の教材に目を向けると、管楽器の初歩的な練習曲として《君が代》が多く取り上げられている。その例として、クラリネット譜（譜例1）とチューバ譜（譜例2）を比較すると、1～2小節目のスラーは同じ位置に配置されたと見ることができる。一方、3小節目のスラーの場合では、クラリネット譜は3拍目、チューバ譜は4拍目から示されている。このような視点からは、各楽器の《君が代》の練習例は画一的ではなく、複数の演奏解釈が存在していると考えられる。

譜例3 《徒步行進》(喇叭譜)<sup>3)</sup>譜例4 「舌の切り方」の練習例(横笛譜)<sup>4)</sup>

## (2) 『陸軍喇叭符』を利用した練習例

明治18(1885)年12月、敬礼、日課、行進などの合計221曲からなる『陸海軍喇叭譜』が制定された。またこれは、明治35(1902)年12月の改正によって廃止された後、『陸軍喇叭譜』『海軍喇叭譜』に分けられたのであった。

このような歴史的背景の下、昭和初期の管打楽器の教材を見ると、「鼓笛隊」の基礎練習の一環として『陸軍喇叭譜』を用いた練習例が紹介されている。例えば、先述の『鼓笛隊指導書並教則本』においては、『陸軍喇叭譜』採録の《徒步行進》(譜例3)を取り上げている。その横笛譜(譜例4)に注目すると、1小節目の音の跳躍や3小節目1拍目の高音で細やかなリズムの演奏例を学ぶことによって、学習者に「舌の切り方」(タンギング)の習得を促していることが確認できる。また横笛譜は、喇叭譜の楽曲構造がそのまま採用され、横笛の演奏法に配慮したアーティキュレーションは付けられていなかった。これらの視点を整理すると、喇叭譜は軍隊の情報伝達手段であったとともに、各楽器の演奏技術の「基礎」を学ぶためのツールとして活用されたと評価することができる。

## 4. 今後の展望

本研究は、このような解説作業を進めながら、昭和初期における管打楽器の教材の誕生と、その基礎練習の種類を整理することに重点を置いている。今後の展望としては、管打アンサンブル教材の分析を試み、「吹奏楽」「喇叭鼓隊」「鼓笛隊」の練習法の独自性を追求していきたい。これらを通じて、過去と現在をつなぐバンド指導のアイデアが提供できればと考えている。

## 謝辞

本研究を行うにあたり研究助成を賜りました、一般財団法人カワイサウンド技術音楽財団、並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

## 参考文献

- 1) 山口常光『クラリネット教本:アルバート・ボエム式』, 1935年, シンフォニー楽譜出版社, p.35.
- 2) 廣岡九一『バスチューバ教則本』, 1935年, 共益商社書店, p.28.
- 3) 永井建子・山本銃三郎『喇叭複音新譜:附・陸軍喇叭譜』, 1908年, 宮本武林堂, p.59.
- 4) 江木理一・小森宗太郎『鼓笛隊指導書並教則本』, 1938年, 共益商社書店, p.21.